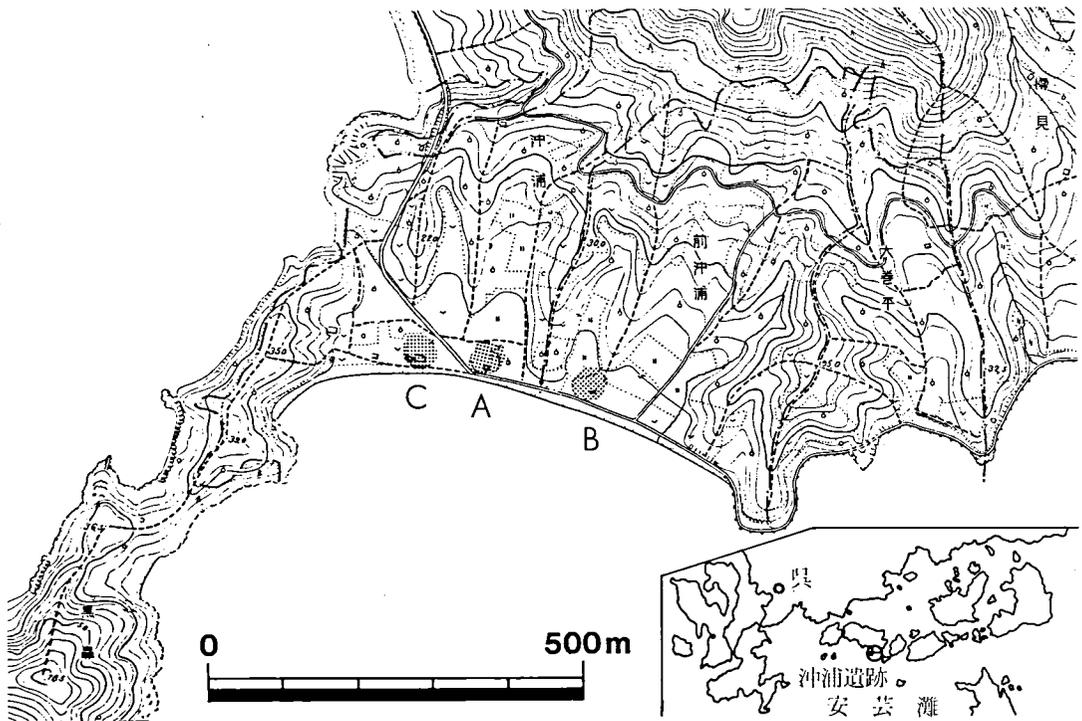


広島県蒲刈町・沖浦遺跡採集資料（2）

古瀬 清 秀・鈴木 康 之
村 田 亜紀夫・北 條 芳 隆
竹 広 文 明

1. はじめに

今年度は前年度に引き続き、広島県安芸郡蒲刈町沖浦遺跡採集資料のうち、弥生時代以降に属する資料を紹介する。沖浦遺跡は蒲刈町の所在する上蒲刈島の南東端に近い砂浜上に立地する。遺跡の範囲は東西 350m前後、奥行20m前後で、遺跡が集中して出土するのは西から順にC、A、Bの3地点であり、縄文時代前期以降中世に至るまでの遺物が採集されている。遺跡の概要、遺物包含層の状態



第1図 沖浦遺跡地形図

などについては前回は詳しく紹介しているので、ここでは再び取り上げない。ただ、前回の報告後、さらに松浦宣秀（蒲刈町文化財保護委員長）、槇野康彦（広島警察署）両氏によって採集された縄文時代遺物のうち、玦状耳飾りと一部の石器については合せて収録した。

今回の報告にあたっては、前回同様、松浦宣秀、槇野康彦両氏には多大の協力をえた。記して感謝したい。また、資料の実測、採拓、図面・図版の作成は広島大学院生の鈴木康之（当時、現広島県教育委員会）・村田亜紀夫・北條芳隆・竹広文明があたり、本文の執筆はこの4名と古瀬清秀があたった。なお、今回報告の資料は前回報告のものを合せて、すべて、蒲刈町郷土資料展示施設に収納している。
(古瀬)

2. 出土遺物

1) 弥生時代の土器 (第2図1～9、図版第1—a)

前期の土器7点、後期の土器2点が採集されている。

a) 前期の土器 (第2図1～7)

1・2は頸部に数条の沈線をめぐらす壺形土器である。1は器壁がやや厚いが焼成は良好で、口縁端部を肥厚させ、丸くおさめている。内面には横方向の磨きと赤色顔料の痕跡が認められる。2はやや薄手で焼成が不良のため磨滅が著しい。3・4は口縁直下に数条の沈線をめぐらす甕形土器である。3は口縁部を外反させ、端部は面とりをしてその外端部に刻み目を施す。4は口縁端を内外に拡張して断面T字形とし、外側端部に刻み目を施している。また、端面にはわずかに赤色顔料が認められる。5は胴部に平行沈線と貼付けの刻み目突帯をめぐらせた壺形土器で、上方には山形文を施している。焼成は不良。6は頸部に6条以上の平行沈線をめぐらす壺形土器である。また、口縁部内面に1条の突帯をめぐらしている。焼成良好。7は4～5条の平行沈線と刻み目突帯をめぐらせた小型短頸壺である。焼成がやや不良のため磨滅が著しい。なお、5・6・7の3点は、施文等の特徴から前期末ごろのものと考えられる。

b) 後期の土器 (第2図8・9)

8は頸部より口縁部を大きく外反させ、端面を上下方向に拡張した壺形土器である。端面には2条の退化凹線をめぐらし、内外面ともハケメ調整を施す。焼成不良。後期前半のものだろう。9は外反する口縁端面を上方に拡張させた複合口縁の甕形土器で、口縁部外面に4条の退化凹線を施す。焼成良好。後期後半のものだろう。(村田)

2) 古墳時代の土器 (第2図10～25、第3図、図版第1、第2—a)

古墳時代の土器としては、土師器・須恵器・製塩土器(一部歴史時代も含む)が採集されている。

a) 土師器 (第2図10～16、図版第1—a)

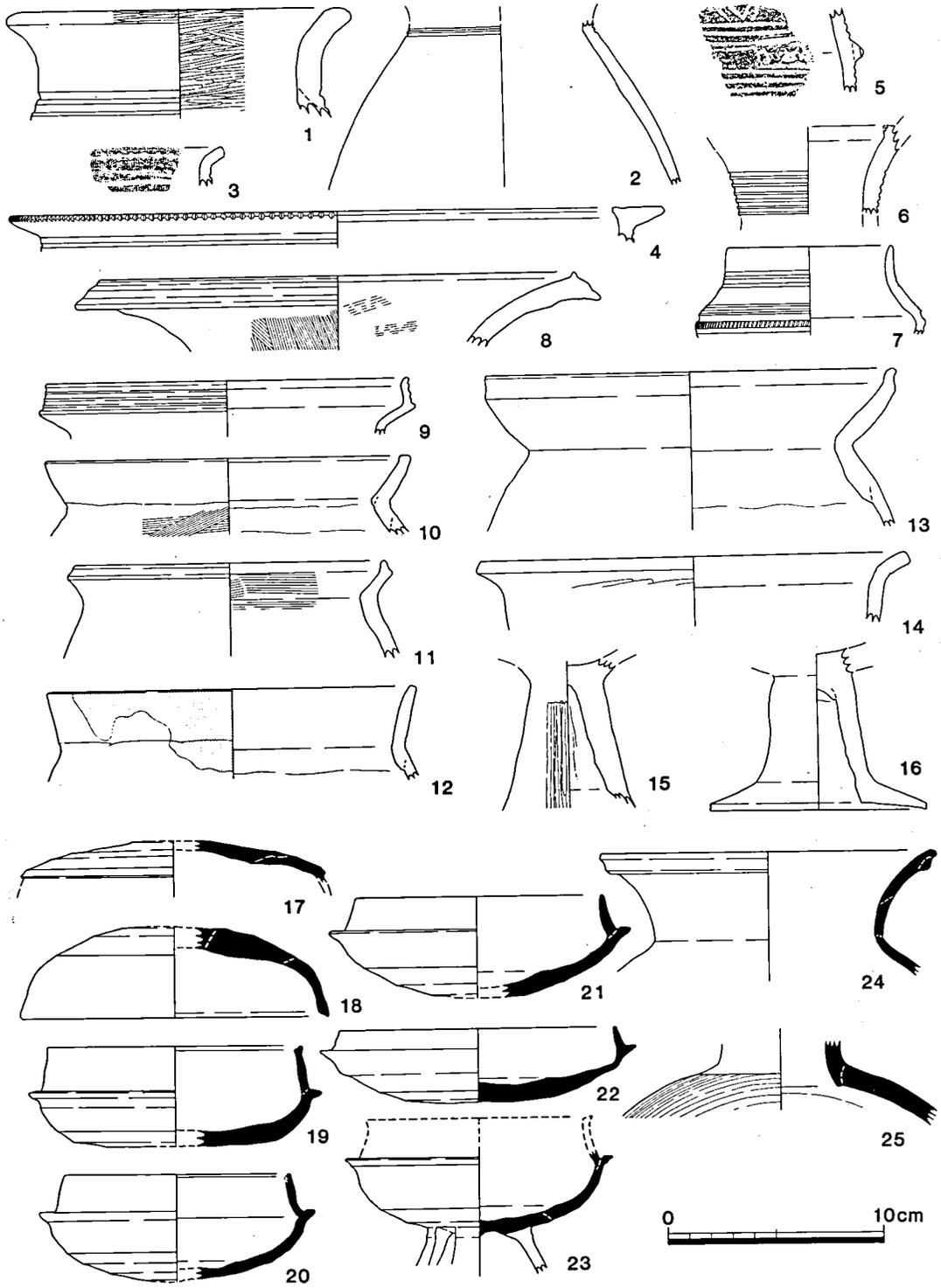
10～13は甕形土器である。10は頸部が「く」の字状に屈曲し、口縁端面は平坦で、内側にやや肥厚する。やや内傾する口縁部とともに布留式の特徴を有する。胴部外面には横方向のハケメを施す。焼成良好。11は「く」の字状に外反する口縁部端面をわずかに上方に拡張し、口縁部内面にハケメを施す。また、内面頸部以下にはすす・炭化物の付着が認められる。焼成良好。12は頸部の屈曲がゆるく直口縁に近い。口縁部外面には煮こぼれ状の炭化物が付着している。焼成良好。13は退化した複合口縁を有するやや大型の甕形土器で、焼成不良のため磨滅が著しい。14は鉢形土器あるいは甕こしぼと考えられる。口縁部を逆「L」字状に屈曲させ、端部は面とりしている。外面は頸部より下方向にヘラナデを施す。15・16は高杯脚部である。15は内面にしぼり痕が残り、一部ヘラ削りの痕跡もみられる。外面には縦方向のミガキを施す。焼成良好。16は内面のしぼり痕をヘラ削りで消し、外面にはナデ調整を施す。脚部下方での屈曲は大きく、特に内面に鋭利な稜をつくっている。焼成はややあまい。(村田)

b) 須恵器 (第2図17～25、図版第1—b)

古墳時代の須恵器には、蓋坏、高坏、甕、提瓶がある。

坏蓋 (17・18)

17は天井部の破片であるため口径は不明。天井部は扁平なつくりで、体部との境界には段を有する。天井部のはほぼ全面に逆時計回りのヘラ削りが施され、内面には同心円文が付されている。18は口径14.2cm。天井部と体部との境界は明瞭でないが、口縁端部には内傾気味の面と浅い沈線を有する。天井部には逆時計回りのヘラ削りが施されている。



第2図 弥生時代・古墳時代の土器（アミ目は炭化物）

坏身 (19~22)

19は口径12.0cm。たちあがりは直線的で、わずかに内傾する。端面は内側へ傾斜し、内面との境界には鈍い稜がつく。受け部はやや下降気味に付き、先端は鋭い。体部から底部にかけては扁平に仕上げられ、底部全体の約4分の3の範囲には逆時計回りのヘラ削りが施されている。20は口径10.4cm。たちあがりは直線的で、その内傾度は19よりきつい。端面は内側へ傾斜し、浅く窪む。受け部はほぼ水平にのび、先端は鋭い。体部・底部は丸く仕上げられ底部全体の約4分の3の範囲には逆時計回りのヘラ削りが施されている。21は口径11.0cm。たちあがりはやや内傾し、端部は丸くおさまる。受け部は水平にのび、先端は丸みをもつ。体部・底部は丸く仕上げられ、底部全体の約4分の3の範囲に逆時計回りのヘラ削りが施されている。22は口径12.8cm。たちあがりは低く、内傾度も強い。端部は丸くおさまる。受け部は外上方にのび、端部は丸くおさまられている。底部は浅く、全体に扁平な仕上がりである。底部全体の約2分の1には逆時計回りのヘラ削りが施されている。また内面には不整方向の仕上げなどが認められる。

高坏 (23)

短脚の有蓋高坏で、たちあがり部と脚部下半を欠く。受け部は水平にのび、立上がりとの境界に一条の沈線がめぐる。坏底部は丸く仕上げられており、底部全体の約3分の2の範囲に逆時計回りのヘラ削りが施されている。脚部には、長方形透かしが三方に穿たれている。

甕 (24)

口径16.0cm。頸部は緩く外反し、口縁直下には稜のあまい凸帯が一条めぐる。口縁端は丸くおさまられている。

提瓶 (25)

提瓶の胴部から頸部にかけての破片である。胴部全面および側面にはカキメ調整が認められる。

これらの須恵器は主に蓋坏の特徴から、型式学的に三分類することができる。最も古い様相を示すのが17と19で、これと併行ないしやや新しい様相を示すものとして20と23の高坏を位置付け得る。これら4点は田辺編年に照した場合のI期後半に当たり、TK 208~TK 23型式の特徴を示している。年代的には五世紀後半から末葉に比定される。また21は、口縁部における端面の消失やたちあがりの内傾度から、先の4点より、やや新しい段階に位置付けられよう。I期末ないしII期初頭に当てたい。年代的には六世紀初頭から前半に比定される。最も新しい様相を示すのが18と22である。この2点はII期後半に当たり、TK 43型式に含め得る。年代的には六世紀後半に比定される。

なお他の器種については型式学的位置付けが困難であるが、蓋坏と対応させて考えれば、24の甕は20および23と同様I期後半に、提瓶は18や22とともにII期後半に位置付けるのが妥当であろう。(北條

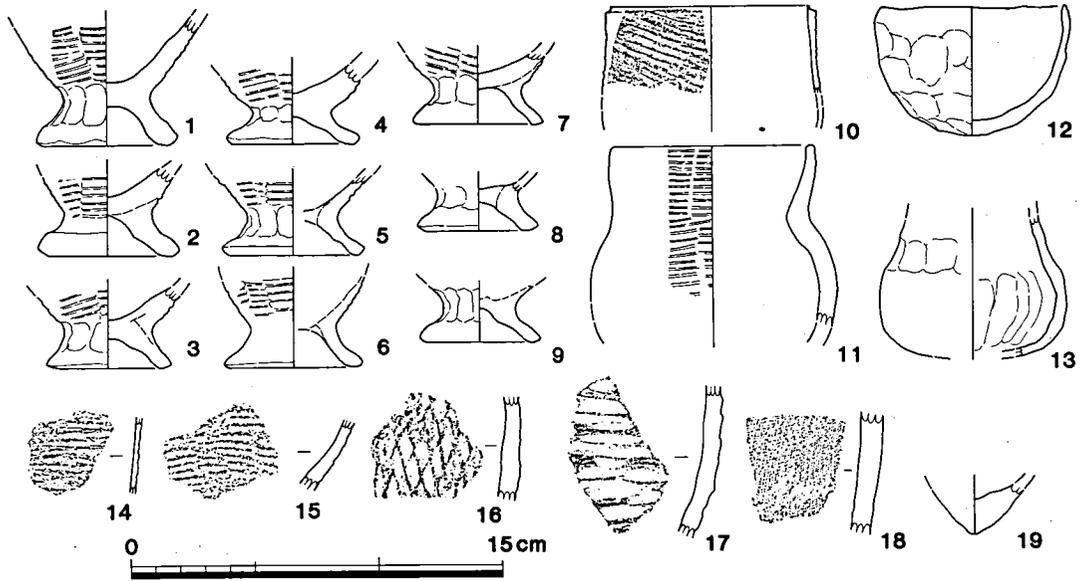
註1) 田辺昭三『陶邑古窯址群I』平安学園考古学クラブ 1966

c) 製塩土器 (第3図、図版第2-a)

多くの資料が採集されており、破片総数は200点に達する。これらは型式学的特徴から以下の6類に分類される。大まかな年代を当てれば、I類は古墳時代前期、II類・III類は古墳時代後期、IV類・V類は古墳時代後期以降奈良時代まで、VI類は奈良時代から平安時代に、それぞれ該当する。なお特記するもの以外はすべて2次焼成を受けており、中には器表面が剝離しているものもある(2次焼成を受けていないものに関しては、形態的特徴から、一応製塩土器とみなしている)。

I類 (1~10、14・15)

器面外面には細かい平行叩きが施され、内面はなで調整されている。台脚部や胴部の破片が多く、概形を復元できる資料はないが、本来は台脚から強く外反した後、ゆるやかに内湾またはほぼ垂直にたちあがる器形であったと思われる。このI類が数量的には最も多く表採されており、台脚で数えて66点ある。台脚部はいずれも指頭圧によって上げ底状に成形されており顕著な差異を認め難いが、胴



第3図 古墳時代・歴史時代の製塩土器

部では器壁が2mm前後の比較的薄手のもの(10・14)と、5mm前後のやや厚手のもの(1・15)との二者があり、この点において細分し得る可能性がある。

II類(16・17)

器面外面には格子目叩き、ないしは粗い平行叩きが施され、内面はなで調整されたものである。図示した2点の他に数点採集されている。I類との顕著な差は器壁の厚さにあり、胴部で5mm以上のものがほとんどである。このII類も、概形を復元できるものはないが、底部は丸底あるいは平底気味の丸底で、胴部は内穹気味に立上がる器形であると思われる。

III類(11)

やや特異な器形で、頸部と胴部との境界を有し、底部は遺存していないが丸底になると思われる。器面外面には平行叩きが施され、内面はなで調整されている。器壁はII類と同様厚手であり、胴部で8mmである。1点のみ採集。なお本品は2次焼成を受けていない。

IV類(12・13)

小形の碗形の器体で、指頭圧によって形成され、器面の内外には多くの凹凸を有するものである。図示した2点のみ採集。器壁は4～5mmである。なお12は2次焼成を受けていない。

V類(19)

底部は尖底であり、器面には内外ともに指先調整に伴う凹凸が認められる。1点のみ採集。

VI類(18)

器外面はなで調整、内面には布目圧痕が認められるものである。図示した1点のみの採集であるため器形の復元はできないが、原形は細長い砲弾形を呈していたと推定される。

さて、以上の各類は、数量的には著しい偏りを示すものの、備讃瀬戸地域における古墳時代から奈良、一部平安時代に至るまでの一連の型式をほぼ網羅しているとみてよい。このことは、本島における土器製塩がこの数世紀にわたる期間、連続的であったか断続的であったのかは不明ながら、ある程度頻繁に行われていたことを示すものであろう。(北條)

註1) 近藤義郎「日本塩業史の考古学的研究」『日本塩業大系 原始・古代・中世(稿)』日本専売公社 1980

3) 歴史時代の土器・陶磁器 (第4～6図、図版第2—b、第3—a)

奈良・平安・鎌倉時代に属するものは輸入陶磁器、緑釉陶器、土師器、黒色土器、瓦器、須恵器がある。

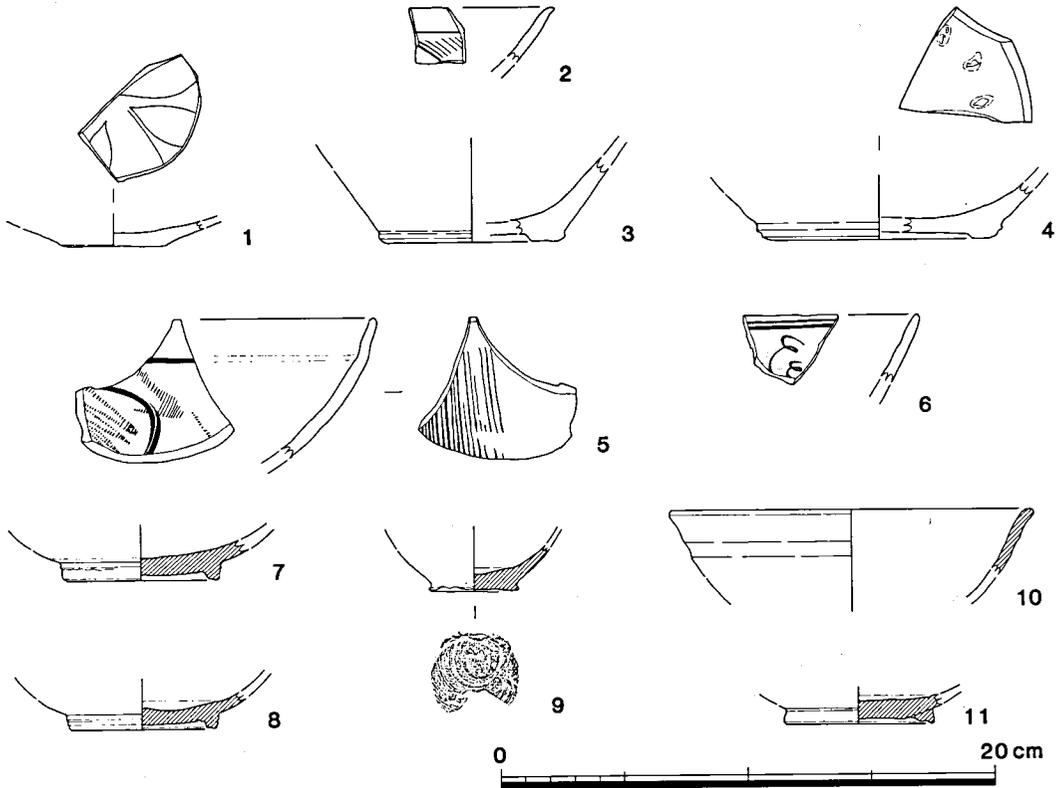
a) 輸入陶磁器 (第4図1～6)

輸入陶磁器としては、白磁(1・2)、越州窯系青磁(3・4)、同安窯系青磁(5)、龍泉窯系青磁(6)がある。

1は白磁皿で、内底面には細い線描きの花文が彫られている。胎土は灰白色のやや粗いもので、外底部の釉は施釉後に削り取られている。2は白磁碗口縁部の破片で、内面には櫛描文が施される。3・4はともに越州窯系の青磁碗で、釉は内外全面に掛けられるが、高台・畳付の釉は部分的に削り取られている。また、内底面には重ね焼きの目跡がある。3は暗緑色、4は褐色がかかった暗緑色を呈する。5は同安窯系の青磁碗で、内外面には櫛描文が施される。胎土は灰色で、ガラス質の釉がやや厚く掛けられている。6は龍泉窯系の青磁碗で、内面に片彫りの文様が施されるものである。胎土は精良で灰白色を呈し、釉は黄緑色で貫入がみられる。

b) 緑釉陶器 (第4図7～11)

7は碗の底部で、削り出しの輪高台をもつ。胎土は堅緻で淡灰色を呈し、高台内側・畳付を除く内外面に淡緑色の釉が掛けられる。8も削り出し高台の碗で、胎土は堅緻で暗灰色を呈する。釉は高台内側・畳付を除く内外面に薄く掛けられている。また、内底面にはヘラミガキの痕跡が認められる。9は、底部を回転糸切りのまま残す小型の碗である。胎土は灰色を呈し、淡緑色の光沢のある釉が外底面を除く内外面に掛けられている。10は碗の口縁部の破片で、今回紹介する緑釉陶器の中ではこれのみが軟質である。胎土は黄褐色を呈し、釉は濃緑色のものが厚めに掛けられている。11は貼り付け



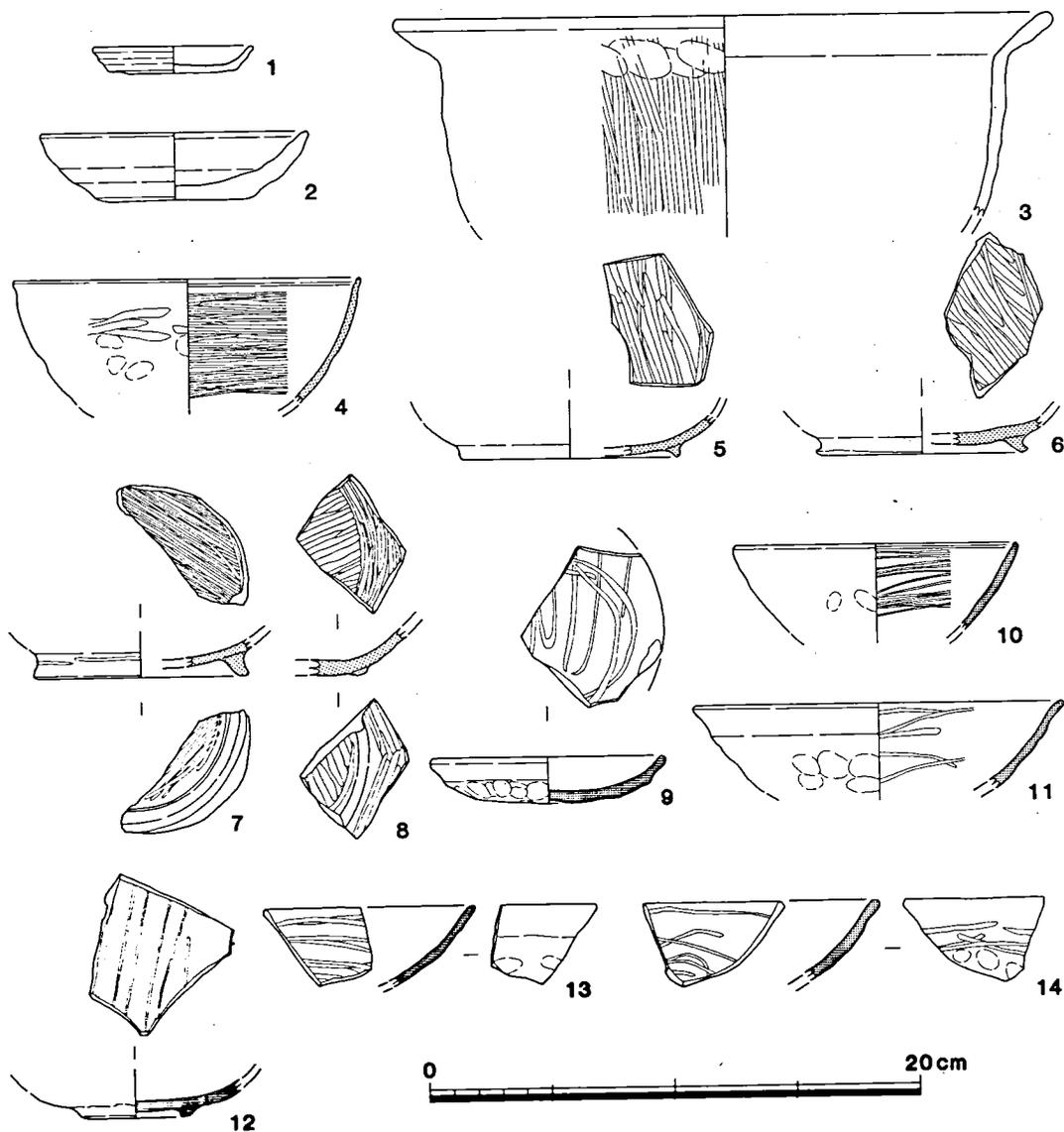
第4図 歴史時代の陶磁器

高台の椀で、高台は内面に段がつき、高台内側には回転糸切り痕を残す。胎土は精良で、淡灰色～淡灰褐色を呈するが、焼きはやや甘い。釉は緑色のものが高台内側を含む内外全面に掛けられている。

以上のうち、7～9については高台を削り出す手法などから平安京周辺で生産されたもの、10・11については釉調、高台の形態などから近江で生産されたものと考えられる。

c) 土師器 (第5図1～3)

1は小皿で、体部内外面にはロクロナデが施され、底部には回転ヘラ切り痕を残す。2は杯で、小皿と同様に体部にロクロナデが施され、底部は回転ヘラ切りである。3は鍋で、半球形の体部に外反する口縁部のつくものである。外面には縦位のハケ目が施され、体部外面の口縁部と接する部分には指頭痕が残る。内面は器壁が剥落しており調整は確認できないが、横位のハケ目が施されていたものと思われる。



第5図 歴史時代の土師器・黒色土器・瓦器

d) 黒色土器 (第5図4~8)

黒色土器には、内面のみに炭素を吸着させたもの(A類)と、内外両面に炭素を吸着させたもの(B類)とがある。

4はA類の椀で、口縁内側には沈線状の段がつく。内面には幅の狭いミガキが施されるが、外面には指頭痕を残し、部分的に幅の広いミガキが施されている。5・6もA類の椀で、内面にはやや幅広のミガキが施される。いずれも、高台は貼り付けられている。また、6の外面には赤色顔料が塗られている。7・8は貼り付け高台をもつB類の椀で、いずれも高台内側を含む内外全面にミガキが施されている。

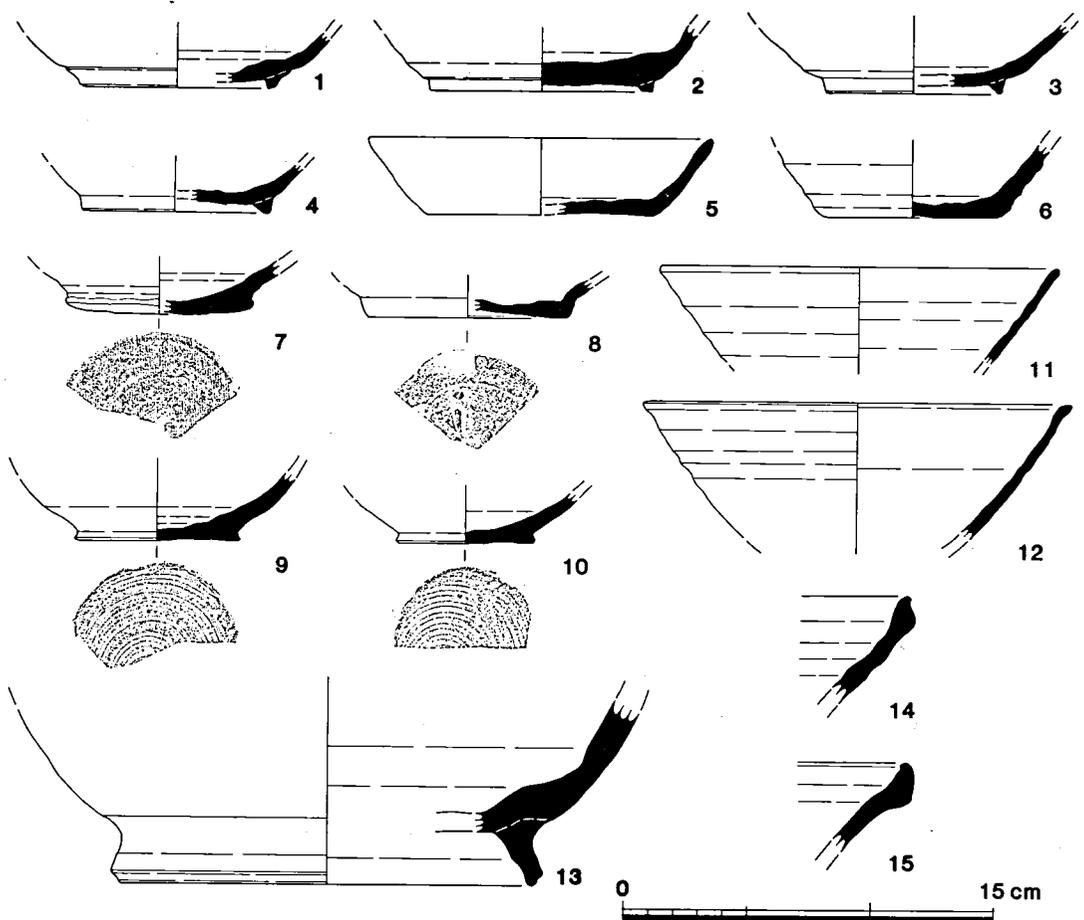
e) 瓦器 (第5図9~14)

瓦器の大部分は和泉型の範疇に入るものであるが、楠葉型も一点含まれている。

9は和泉型の小皿で、体部外面には指頭痕を多く残し、口縁部にはヨコナデが施される。内面のミガキはやや幅広である。10は楠葉型の椀で、口縁内側には細い沈線が入る。内面には幅の狭いミガキが施されるが、空白部分も認められる。外面は、磨滅によってミガキは明らかでない。11は和泉型の椀で、雑なミガキが内面に施されるが、外面のミガキは確認できない。12も和泉型の椀で、内底面に幅の狭い平行ミガキが施される。また、外底面の高台内には×のヘラ記号がある。13・14も和泉型の椀で、14は外面にもミガキが施されている。

f) 須恵器 (第6図)

1~4は有台の杯で、1・2には断面方形の高台が、3・4には断面三角形の高台が貼り付けられ



第6図 歴史時代の須恵器

ている。5・6は無高台の杯で、ともに底部には回転ヘラ切り痕を残す。7・8は底部を高台状にやや高く作り出す椀である。9・10は底部に回転糸切り痕を残す椀で、11・12がこうした椀の体部になるものと思われる。11・12は、いずれも内外面に強いロクロナデが施されている。13は高台をもつ壺の底部である。14・15は東播系のこね鉢の破片で、口縁部外面は重ね焼きによって帯状に黒くなっている。

以上紹介した歴史時代の土器類のうち、越州窯系青磁・緑釉陶器・黒色土器などは9・10世紀代に位置づけることができ、龍泉窯系青磁・土師器・瓦器などは13世紀代に位置づけられるものが多い。須恵器は、奈良時代から鎌倉時代にかけてのものがみられるが、平安時代のものが中心になっているようである。こうした資料から、この遺跡が奈良時代から鎌倉時代にかけて断続的ではあるにせよ利用されていることがうかがえるが、9・10世紀代の遺物が質・量ともに目立っており、この時期に一つのピークがあったと考えられる。(鈴木)

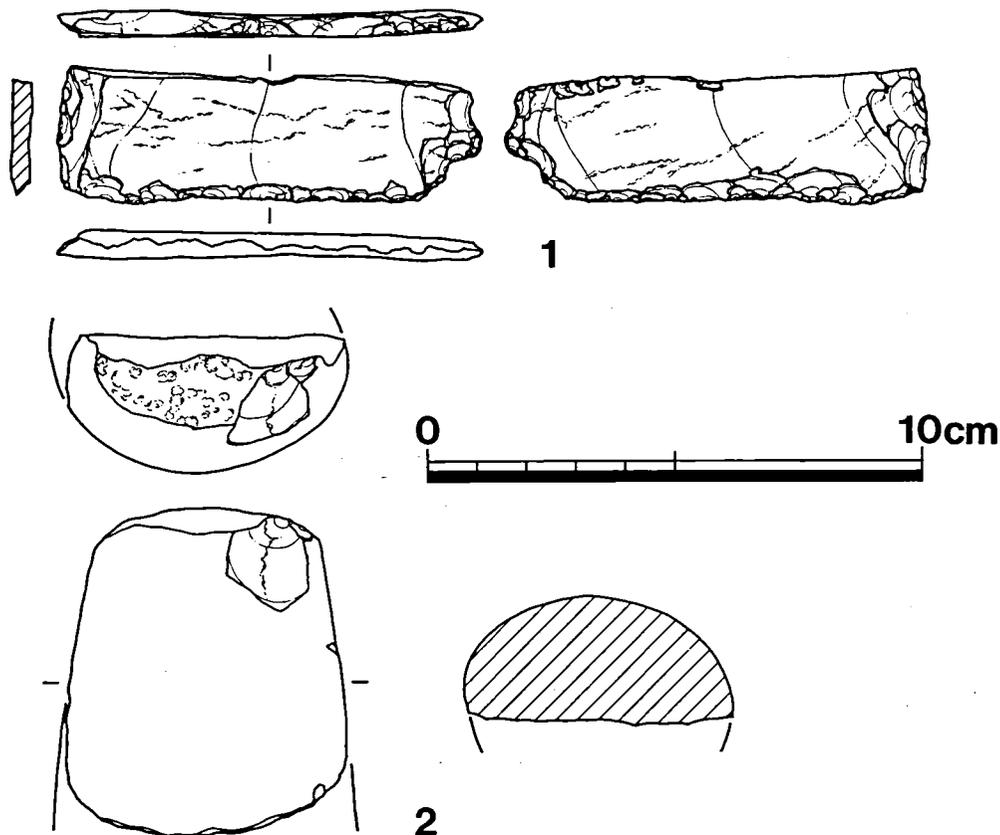
4) 石器 (第7～9図、図版第3—b)

総数12点のうち、弥生時代のもの2点、縄文時代のもの10点である。後者のものには剥片、石核、玦状耳飾りを含む。

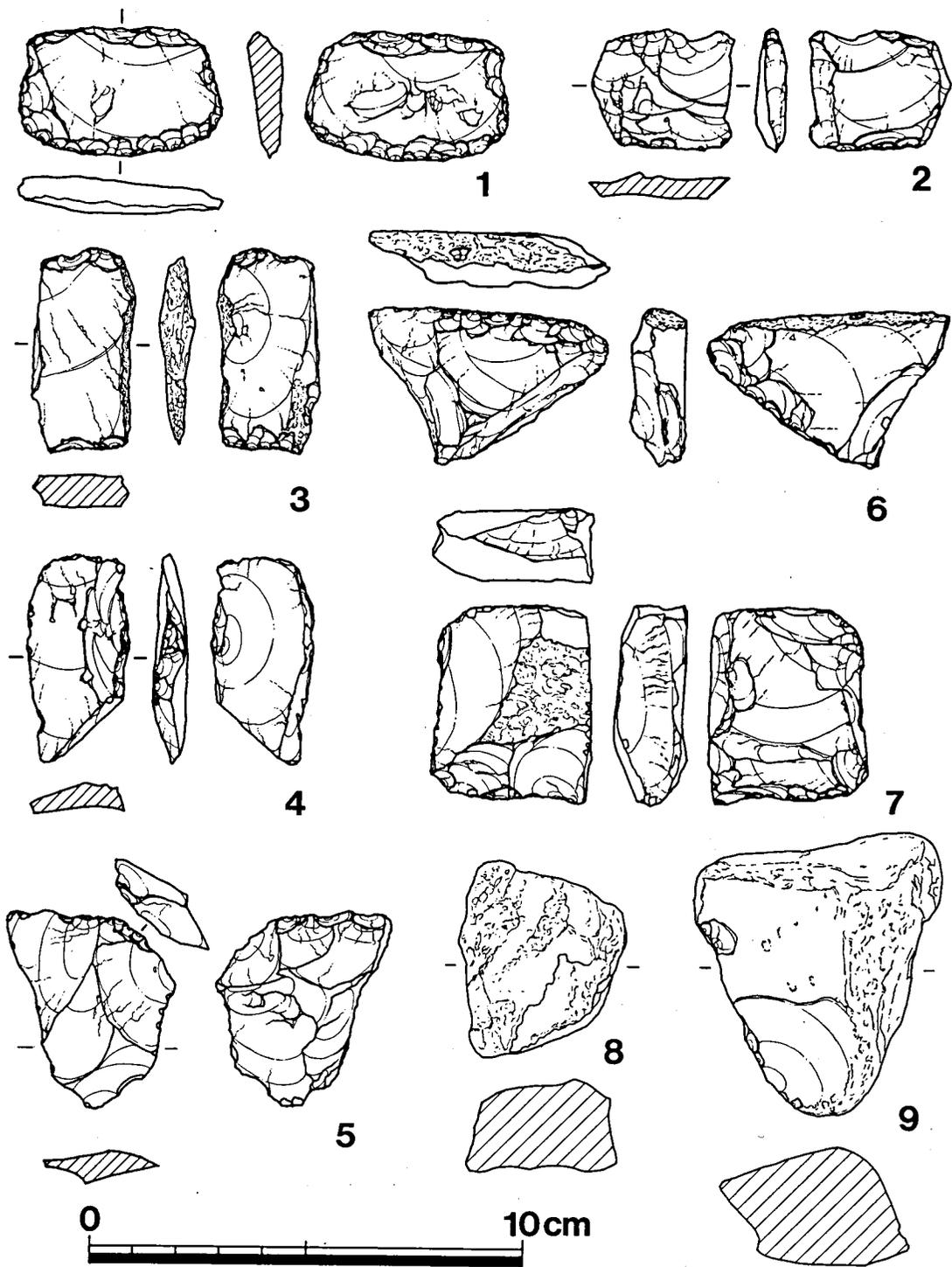
a) 弥生時代の石器 (第7図)

打製石庖丁 安山岩製。薄く剥離した剥片を素材とし、両面加工によって直線の刃部を作り出している。側縁にも両面加工を施すが、片側は抉りを入れ突起状に仕上げている。背部は折損しているが、素材の成形を意図して折ったのかもしれない。長さ 8.6cm、幅 2.8cm、厚さ 0.6cm、重量17.5g。

磨製石斧 石質は不明。基部破片で、残存長 6.7cm、幅 5.7cm、厚さ 2.8cm、重量 143g。



第7図 弥生時代の石器



第8図 縄文時代の石器

b) 縄文時代の石器 (第8・9図)

スクレイパー (1) 安山岩製。横長剥片を素材とし、その全周に両面加工を施している。打面が存在した部分は急角度の背部加工を施し、残りの3辺に刃部を作り出している。刃部加工は細かく丁寧である。磨滅顕著。長さ 4.7cm、幅 3.0cm、厚さ 1.0cm、重量11.7g。

楔形石器 (2) 安山岩製。横長剥片を素材とし、長側縁部両側に細かな剥離痕がみられる。短側縁には両側に截断面が存在する。片側は一方向からのものだが、もう一方は両側からの截断面が中で接している。残存長 3.2cm、幅 2.3cm、厚さ 0.7cm、重量 6.6g。

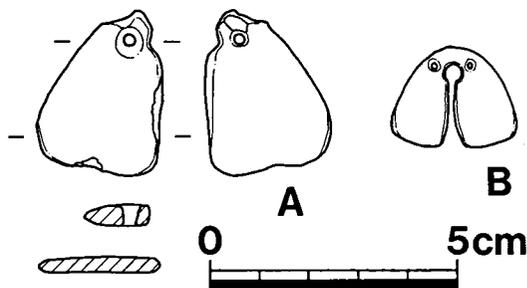
二次加工のある剥片 (3) 安山岩製。自然面を打面にして剥離された横長剥片を素材とし、両側縁に両面加工を施している。長さ 4.3cm、幅 2.4cm、厚さ 0.7cm、重量10.4g。

剥片 (4・5) ともに安山岩製。4は横長剥片。長さ 4.8cm、幅 2.4cm、厚さ 0.8cm、重量 6.6g。5は不整形の剥片である。長さ 4.6cm、幅 4.0cm、厚さ 0.8cm、重量12.9g。

石核 (6・7) ともに安山岩製。6は剥片を素材とし、分割面を打面としてわずかに作業を行っている。長さ 5.6cm、幅 3.6cm、厚さ 1.3cm、重量23.7g。7は主に素材の縁辺部を用いて剥片を生産している。長さ 4.6cm、幅 3.7cm、厚さ 1.7cm、重量36.8g。

黒曜石石材 (8・9) 乳白色を呈した姫島産の黒曜石と考えられる。ともに表面が著しく磨耗した転石であり、こうした状態で原産地より搬入したと考えられる。8は長さ 4.5cm、幅 3.9cm、厚さ 2.1cm、重量35.8g。9は長さ 6.6cm、幅 5.7cm、厚さ 2.2cm、重量 100.6g。

球状耳飾り (第9図A) 石質は不明。半分が欠損している。原形は隅丸の略三角形を呈するものと考えられる (B)。上部の穿孔は片面から施し、表面を入念に研磨しているが、磨滅が著しく方向は不明である。残存長縦 3.3cm、横2.5cm、厚さ 0.4cm、重量 4.1g。(村田)



第9図 球状耳飾り

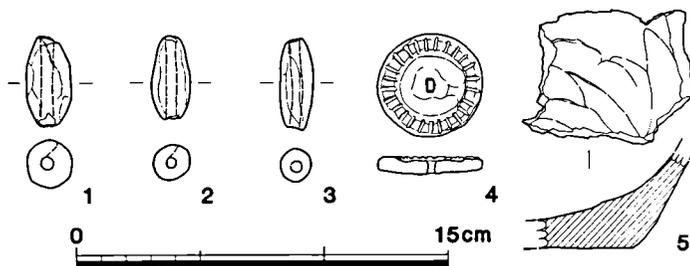
5) その他の遺物 (第10図、図版第3-b)

いずれも所属する時期は特定できないが、土錘、土製円盤、石鍋片がある。

土錘 (1~3)

3点採集されている。いずれも管状土錘で、板状に伸ばした粘土塊を棒状工具の回りに巻きつけて成形されており、成形時の合せ目が認められる。

重量は1が10.1g、2が5.6g、3が5.3gである。



第10図 その他の遺物

土製円盤 (4)

片面に縁取りされた径 4.3cmの円盤に、長方形の中心孔を穿った土製品で、縁の上面には刻み目が施されている。機能、年代ともに不明。

石鍋 (5)

滑石製の鍋の底部片で、色調は黒褐色。内面にはノミ状工具による成形痕が認められる。(北條)

結語

今回、沖浦遺跡採集資料(2)として、弥生時代以降に属するものを紹介した。これらの遺物の大半はC地点からの出土であるが、まず、弥生時代については前期、後期の遺物が少量採集されている。瀬戸内の島嶼を含む海岸に立地する弥生時代前期の遺跡は比較的多く知られており、沖浦遺跡もその一例とすることができる。弥生時代の早い段階から浜堤背後に形成された後背湿地を利用して、小規模な水田農耕が営まれていた可能性が考えられる。中期になると、沖浦では遺物がほとんど採集されていない。ただ、この時期には沖浦から内陸部へ少し入りこんだ、大浦地区の標高100mの山腹に丸尾遺跡が存在することに注目したい¹⁾。ここでは遺跡地のごく一部が調査されたが、中期後半の竪穴住居跡などが発見され、土器、石器類などが出土している。ここに小規模ながら、集落が存在していたことがうかがえる。この時期には瀬戸内島嶼各地に防衛用の高地性集落が形成されており、沖浦でも海岸地を避けて、集落がやや奥まった小高い山腹に移動したことも考えられる。

古墳時代から古代にかけては、全遺物量に占める製塩土器の比率が非常に高くなる。製塩土器は古墳時代前期、後期、奈良時代～平安時代に属するものがあり、遺構としては古墳時代の貼石製塩炉も確認されている。さらに、中世頃の濃縮した塩水溜めとみられる粘土貼土壇もあり、製塩活動が少なくとも中世頃まで継続して行われていたことがわかる²⁾。

さて、最近まで、芸予島嶼における、師楽式土器と呼ばれる一連の製塩土器を出土する製塩遺跡は、竹原市沖合の大崎上島周辺まで知られていたが、今回、上蒲刈島まで西方に拡大されたことになる。この上蒲刈島では沖浦遺跡の反対側、島の北側の宮盛地区に前半期に属するとみられる峠古墳がある³⁾。小規模な円墳であるが、このような古墳は他の島嶼の例からみて、塩の生産や漁業に従事する集団を統率した小首長層のものと考えられ、沖浦や大浦地区などで製塩、漁業に携わる集団を率いていたのがこの峠古墳被葬者の可能性もある。

引続き製塩活動が行われた平安時代に属するものとして、緑釉陶器、輸入陶磁器(越州窯系青磁)など特異なものがある。これらの器物は一般日常雑器類として普及していたとは考えられず、主として寺社、官衙、富裕階層が独占して使用していたといってもよい。このような器物が出土する以上、遺跡の性格を単なる製塩、漁業集団の集落と簡単にかたづけるわけにはいかないだろう。

香川県大浦浜遺跡⁴⁾、三重県贄遺跡⁵⁾などでは、著名な岡山県大飛鳥遺跡の国家の関わる盛大な祭祀などの規模はないものの、奈良三彩小壺、緑釉陶、皇朝十二銭など特殊な遺物が出土している。これらの遺跡では共通して、大量の製塩土器、漁具が出土しており、そうした生産活動に対する祭祀行為がなされた結果とみる見解がある。祭祀の施主の実像は不明であるが、特異な器物を調達しうる立場にあることが前提条件となつてこよう。沖浦遺跡では9～10世紀頃の遺物出土量が全体で最も多く、この頃がこの遺跡の中心時期であったことがわかっているだけに、特に海に関する生産活動が、島内というよりはむしろ島外の有力層に重視されていたのであろう。

また、中世以降については、13世紀頃の遺物が出土しているが、倉橋島、下蒲刈島を中心に勢力を誇った有力な海賊衆、多賀谷氏との関係はどうかであろうか。多賀谷氏は14世紀前半にこの地域に入部しており、上蒲刈島が勢力下に組入れられるのもほぼこの頃であろう。とすれば、直接的な関連性は求めにくいですが、輸入陶磁器類の出土をみると、有力な階層が居住していた可能性もあり、沖浦を含めた地域が多賀谷氏入部以前に重要拠点となる下地は揃っていたともいえる。多賀谷氏の入部後は、大浦地区の丸尾城が多賀谷氏と姻戚関係にあった重見氏の居城となつたといわれている⁶⁾ことから、上蒲刈島東半部の中心域は大浦地区となつていったのであろう。この後の沖浦遺跡は考古資料でみれば限り、非常に貧弱で、衰微の一途をたどっていったようである。

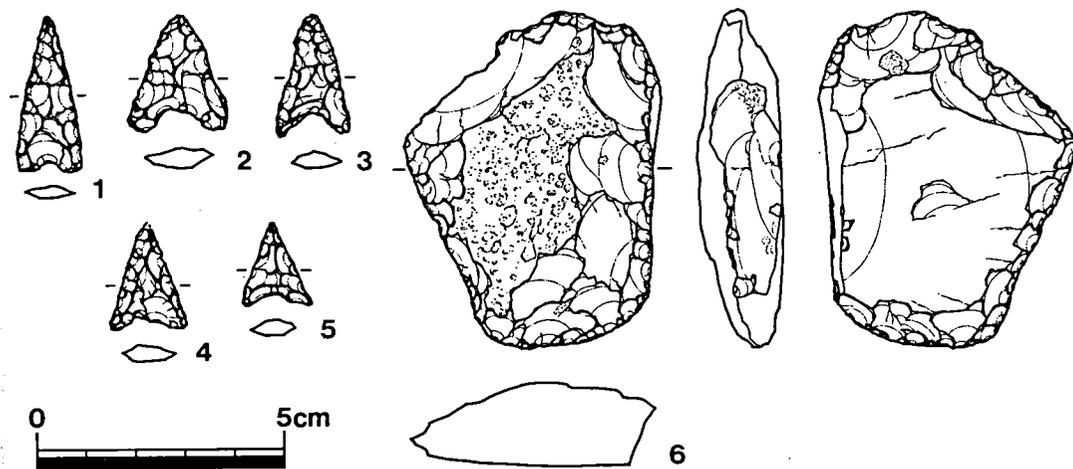
(古瀬)

- 註1) 桑田俊明・松浦宣秀『丸尾遺跡発掘調査報告書』蒲刈町教育委員会 1982
 2) 桑原隆博『沖浦遺跡』蒲刈町教育委員会 1984
 3) 古瀬清秀・池田次郎『峠古墳発掘調査報告書』峠古墳発掘調査団 1979
 4) 大山真充ほか「大浦浜遺跡の調査」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報』Ⅳ、Ⅴ 香川県教育委員会 1981、1982
 5) 鳥羽市教育委員会編『鳥羽 贗遺跡』 1975
 6) 大山真充「香川・大浦浜遺跡の国家的祭祀について」森浩一編『考古学と古代史』 1982
 7) 河合正治「多賀谷氏の歴史」『多賀谷水軍と丸屋城跡』下蒲刈町 1981

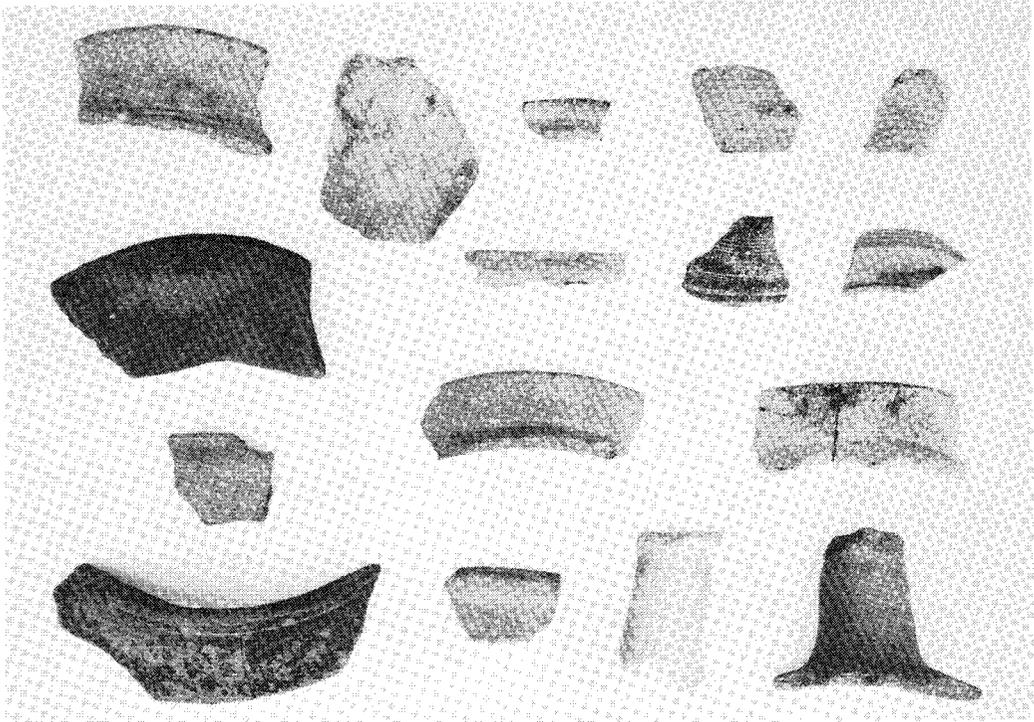
〈追記〉

脱稿後、松浦氏から、沖浦遺跡で石鏃を採集したとの連絡を受けた。当初から、この遺跡では縄文、弥生時代の厚い包含層がありながら、石器類、特に石鏃の出土が少ないという印象があったが、砂浜を丹念に歩いてみると、意外に採集できるようである。付図-5のように磨滅でツルツルになっているものも含まれているので、包含層から流失し、海中で波に洗われている遺物も相当に存在するようである。新たに採集できた資料を紹介しておく。

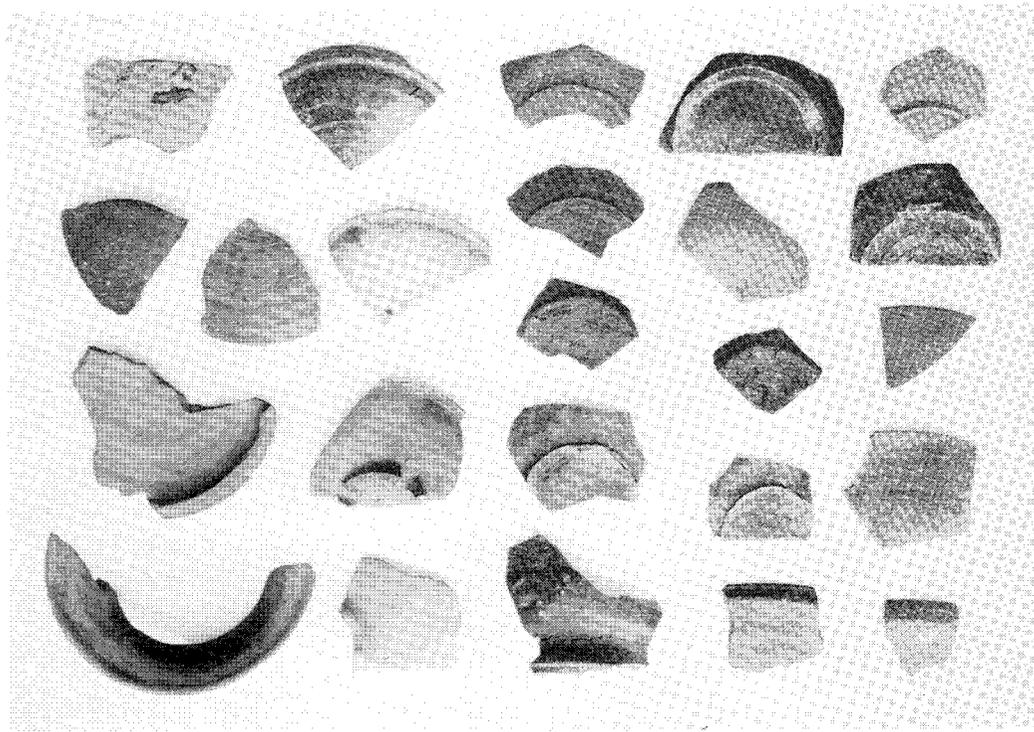
図示した資料は、いずれも安山岩製剥片石器で、1～5は石鏃、6は石核である。1～5の石鏃は、いずれもほぼ全面に加工がほどこされており、重さは、それぞれ1.3g、1.5g、1.0g、1.0g、0.7gである。6の石核は、剥片を素材にしており、裏面中央に素材剥片の主要剥離面がのこっている。素材の縁辺部で、交互剥離をして剥片を生産しているが、折損後は、折損面を打面にして、素材の背面側で剥片を生産している。側面図に示してあるのが、折損面である。なお、縁辺部にはこまかな剥離痕が連続しており、ツールとして利用された可能性もある。しかし、同部のツブレ痕は顕著であり、仮にツールとしても、スクレイパーではないであろう。重さは65.8gである。これらの石器は、海岸で採集されたものであり、大半の資料は稜が磨滅しており、特に5が著しい。(竹広)



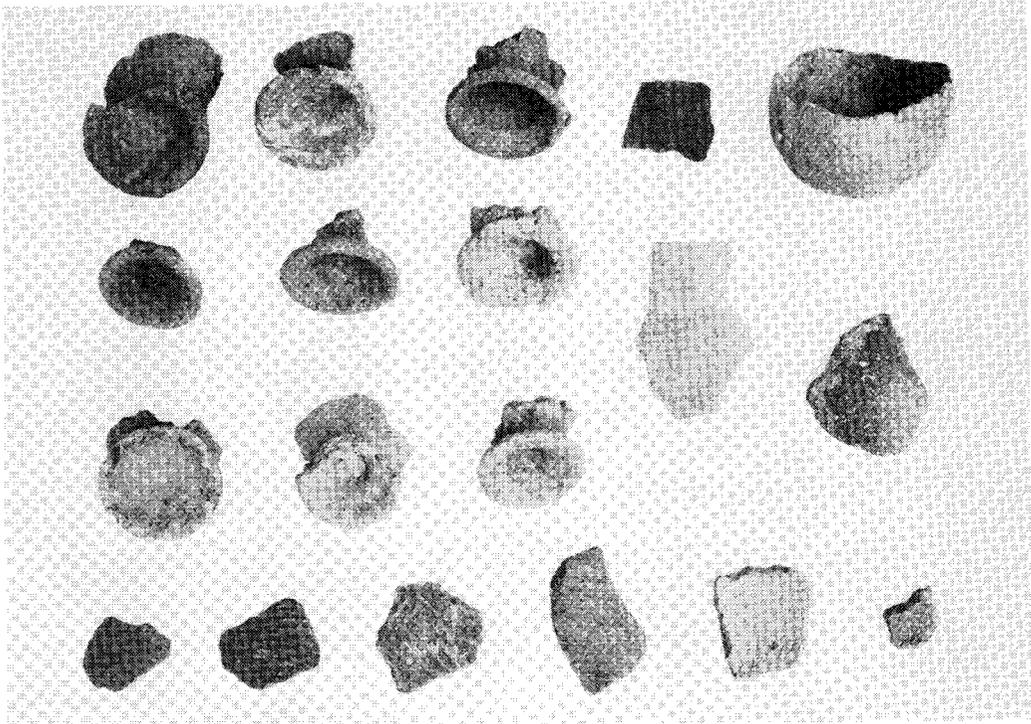
付図 沖浦遺跡採集の石鏃など



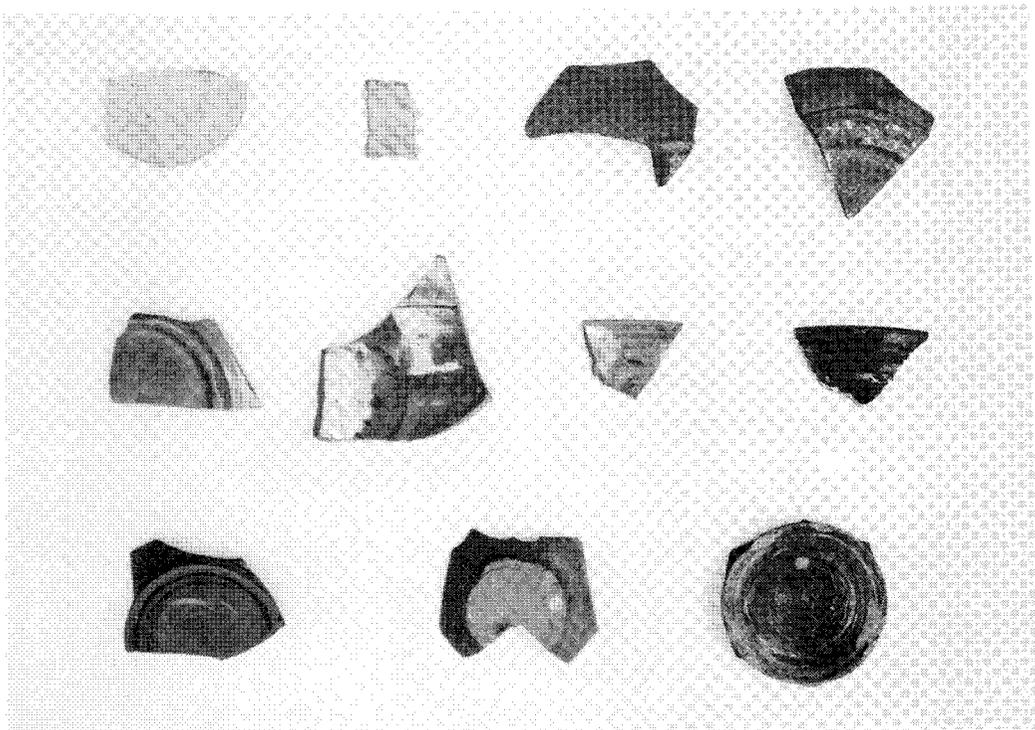
a 弥生土器・土師器



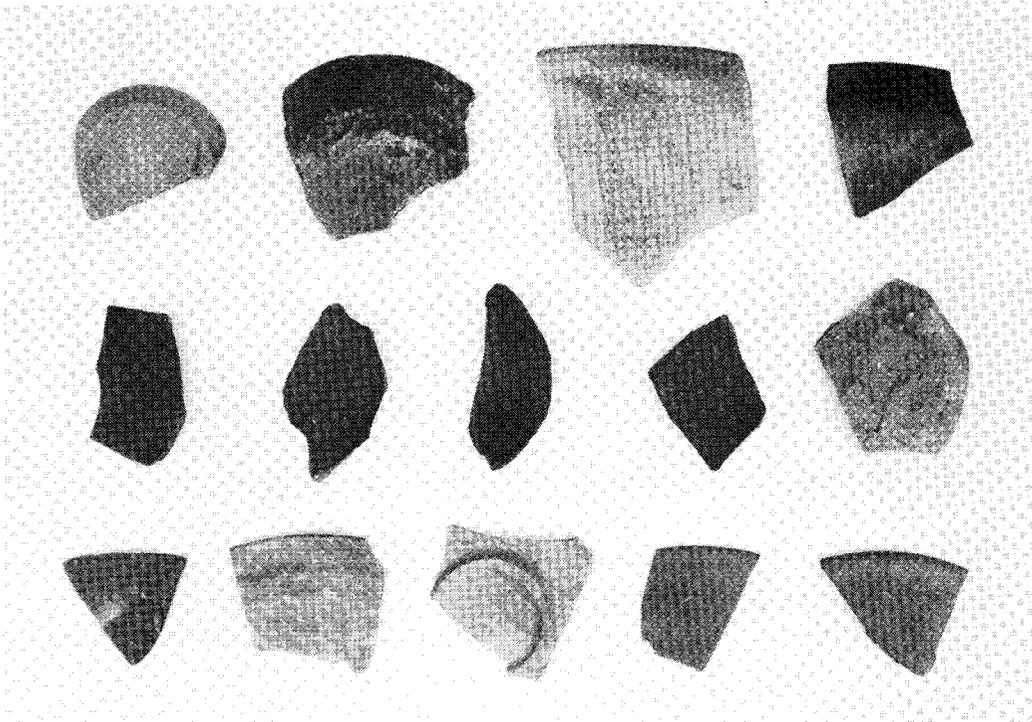
b 古墳時代・歴史時代の須恵器



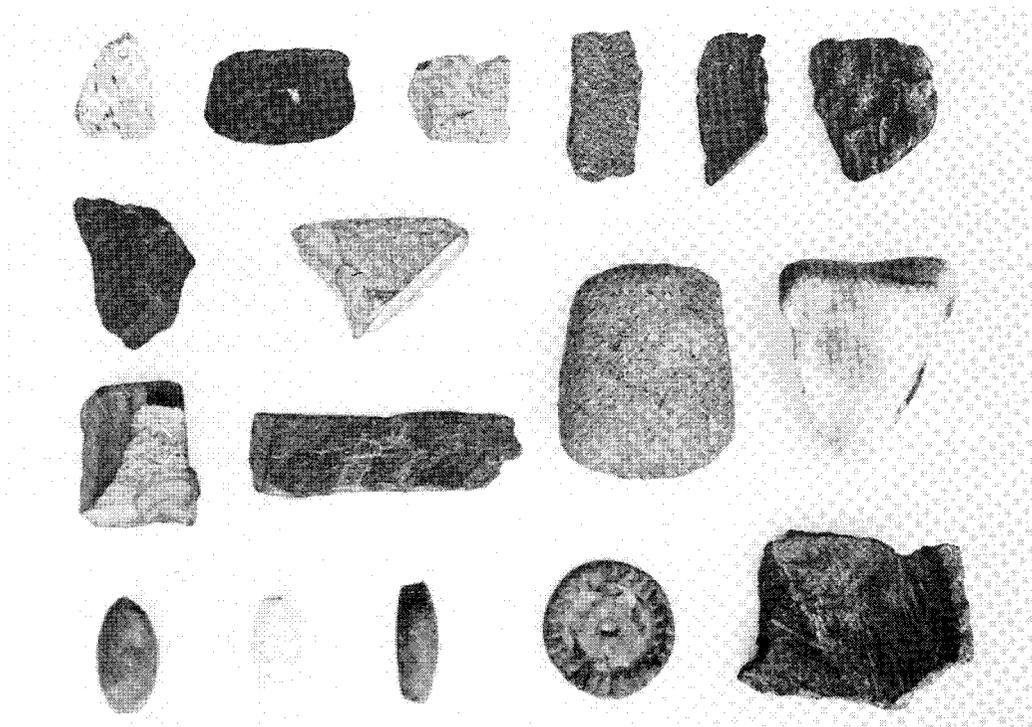
a 古墳時代・歴史時代の製塩土器



b 輸入陶磁器・緑釉陶器



a 歴史時代の土師器・黒色土器・瓦器



b 縄文時代、弥生時代の石器・その他の遺物